

総長対談

大学を設計する —社会と人生と—

安藤 忠雄 東京大学特別栄誉教授
小宮山 宏 東京大学総長



現在世界で最も活躍しておられる建築家のお一人、安藤忠雄本学特別栄誉教授をお招きし、小宮山宏総長とご対談いただきました。

大学について考えることは、とりもなおさず社会を、そして地球全体を考えること。そしてまた、わたしたち個人にとっての人生そのものを考えること。

個々人の生き方が大学という場を通して、どのように全世界、全地球につながるのか…

淡青

[TANSEI] 2005/04
東京大学広報誌 第15号
The University of Tokyo Magazine April, 2005 Vol.15

15

「淡青」について
東京大学と京都大学(当時は東京帝国大学、京都帝国大学)が1920年に最初の対抗レガッタを瀬田川で行った際、抽選によって決まった色が「淡青(ライト・ブルー)」であり、本学の運動会をはじめスクール・カラーとして親しまれてきました。

平成17年4月1日、東京大学が国立大学法人東京大学として生まれ変わってちょうど1年が経過するとともに、これまで4年間その任にあたった佐々木毅総長に変わり、小宮山宏新総長が第28代総長に就任いたしました。小宮山新総長の就任にともない、理事・副学長の数が、従来の9名から7名体制へとスリム化いたしました。

ここにお届けする淡青15号では、小宮山新総長をはじめとする新体制の役員の方々それぞれの抱負、方針を語っていただく特集、「東京大学の新体制」を準備いたしました。また、本号の特別企画として、建築家、安藤忠雄本学特別栄誉教授をお招きし、小宮山総長と、教育について、大学について、環境について、人生について、そして東京大学の未来と新たな施策について、縦横にお話いただきました。

東京大学が学問の府であることは永遠に変わることはありませんが、法人化から1年を迎え、国立大学法人東京大学は何を目指し、どこへ向かおうとしているのか、新たに変わろうとする東京大学の一端をご紹介します。

なお、本号より横組みのスタイルに改めました。ご感想などお寄せいただければ幸いです。

広報委員会委員長 大木 康

Contents

02 [総長対談]
大学を設計する —社会と人生と—
／ゲスト 安藤忠雄 (東京大学特別栄誉教授)

11 [特集]
東京大学の新体制
小宮山宏新総長就任

20 キャンパスニュース

23 インフォメーション

大学生になって 正門をくぐる思い

小宮山 安藤先生には「UT Forum 2000 in Boston」で初めてお会いして、それからお話を伺ったり、お仕事もいろいろ拝見させていただいています。

大学生たちあるいは若い人たちをごらんになってどのような印象をお持ちですか。

安藤 東大の卒業生が事務所に十数人いますが、いろいろと考えさせられますね。仕事に対する愛情が薄い。それは、どこからきているのか。

実は、昨年8月に小澤征爾さんのサイトウ・キネン・フェスティバル松本のオペラの舞台を設計したんです。そのときの小澤征爾さんを見て、音楽に対する愛情と、人間に対する責任感みたいなものがひしひしと伝わってきて、「いいなあ」と思いましたね。

それと、先日、小柴先生が特別栄誉教授の授与式で「東大の正門をくぐったとき、ここで自分が勉強できるのかと思って、すごくワクワクした」といっておられました。私も40年ほど前に、正門から安田講堂をみて、「すごいな。こういうところで勉強している幸せな人たちがいるんやな」と思ったことを小柴先生の話聞いて思い出しました。司馬遼太郎の『坂の上の雲』を読んでも、あの当時の人たちの志は高いと思いますね。秋山兄弟もそうですが、なんといっても子規と漱石。子規は東京大学を中退するんですが、東京大学に入ったときは「総理大臣になってこの国のために尽くしたい」と思ったそうです。写真を見ると、総理大臣というより芸術家という雰囲気なんです。その子規が大学に入ったときに大きな志を持っていたという話と、小柴先生の話が重なって、大学の正門をくぐったその当時の人たちに思いを馳せました。

それに、子規は野球の大ファンで、自分でもやっている。俳人「正岡子規」とい

うイメージとのギャップはあるものの、楽しそうに生きているなという感じがしますね。

いまの学生にも、「生きていて楽しい」という姿をみせてほしいと思いますね。

他者を感じる力を 養う

小宮山 私も本当にそう思います。一般に、人と人とのまじわりが淡泊になってきていますね。人と初めて出会って関係をもつというのは、ある種、緊張感をともないます。いまはコンピュータとかゲームとか、一人の世界に入って閉じこもってられる状況もあって、人とあまり深く付き合わなくても、何となくすぎてしまう。私は、いま一番大事なのは「他者を感じる力」だと思っていますが、それが弱ってきている。もちろん、知識の力は必要です。これは時代の本質をとらえていく力ですから。だけれども、私は学生たちに、喧嘩してもいいから、もっと深くつきあって、他者を感じる力を養ってほしいと思っています。

安藤 これは大学の教育だけではなかなかできないですね。東京大学の学生たちは、子どものころから成績優秀で、周囲も勉強ができるということで、もてはや部分もあって、なかなか「他者を思いやる」ということまで考える時間がないんじゃないですか。

小宮山 まずは人と深くつきあう、これが大切でしょうね。

「大学生たちあるいは若い人たちをごらんになってどのような印象をお持ちですか。」



小宮山 宏
Hiroshi KOMIYAMA

1944年生まれ。72年東京大学工学博士、88年工学部教授、2000～02年大学院工学系研究科長、03年4月副学長、04年4月理事（副学長）。05年4月より第28代東京大学総長に就任。

自律分散協調型の 大学を設計する

小宮山 私は安藤先生が非常にうらやましいと思っています。安田講堂で退官記念講演をされたとき、安田講堂に入りきれない人たちであふれた。これは、建物によって先生の“思い”がみんなに可視化されるということも、人気を博する理由の一つであるわけです。つまり設計したものが形になってみえる、ということがすごく重要だと思うんです。

私は、いま、大学を設計しようとしています。4000人の教員がお互いに理解を深め、社会に大学でやっていることをみってもらうために、知識が形として表現されることが大事なんです。知識の統合化を大学の中でも打ち出したいのですが、安藤先生の「表現することが仕事そのものである」という、ここに大学も知識の府として学ぶところがあると私は感じています。

安藤 小宮山先生は「自律分散協調型」といっておられますが、実際は自律分散型というか、知の細分化がどんどん進んでいっているように感じますね。

東京大学の先生方は、同じ学部の人でもほとんど対話しません。いわんや、別の学部の先生ともです。みんなが自律して、分散しているから、これでは小宮山先生のいわれるような総合力にならない。しかし、先生方はそれで十分満足されていますね。

小宮山 うーん… ある程度、社会的な評価も受けているし、それなりに満足している面もあるかもしれないけれども、満たされないものも感じているんじゃないですか。

私の専門は工学です。工学は実学ですから、自分の仕事が社会にもっと利用されてもいいんじゃないかと思っていますが、仕事の成果が論文でだされることが多いので、みんなに知られていない。私が委

員長を務めた『動け!日本』緊急産学官プロジェクトの価値は、みんなが社会というものを考えて、社会に役立つように、自分たちの断片的な仕事を統合したことだと思います。あの80人は、友人同士が多かったにもかかわらず、それまでお互いが何をやっているのか知らなかったんですね。あのとき、われわれの仕事の一つに統合できれば何か非常におもしろいものになりそうだという思いを強くしました。

だから、先生方が満足しているかという、その先にあるものというか、もっと社会に寄与したいという思いを抑えながら満足しているのではないかという気がします。

生きているという 体感をもつこと

安藤 学生たちをみていると、社会に無関心ですね。

小宮山 そう感じられましたか？

安藤 ええ。自分の仕事に対する愛情から、国に対する愛情とか、地球環境に対する愛情、世界観、そういうものにまで発展していかなければならないはずなのに、自己完結型にどんどん埋没していつている。

子どものころから、ひたすらセンター試験で優秀な成績をとるために勉強するなかで、あまりにもそちらに重きを置いたおかげで、生きた体験がないんじゃないでしょうか。体験がないから、自分に対する責任感がどんどん薄れていつている。「責任ある個人」には、体験と知識、両方がいると思うんですが… どちらかという体験することによって責任感が生まれてくるんじゃないですかね。

小宮山 センター試験と先生はおっしゃ

「生きていて楽しい」という姿を見せてほしいと思いますね。



安藤 忠雄
Tadao ANDO

東京大学特別栄誉教授
(略歴は10ページ)

ったけれども、あまりわき目をふるなどいわれているわけですよ。だから、学生にそれをいってもかわいそうで、ここに社会の教育に対するコミットメントが必要になってくる。インターンシップ*でも、外国に行ってもいいし。教養学部でも施設を利用した体験実習を企画していますが、いろいろな体験を通して、「他者を感じる力」や「責任感」「社会に対する関心」が培われてくるわけですから、体験をもっと与える機会をつくろうと思います。そのためには皆さんの協力が必要ですね。

*インターンシップ 学生が企業等において自らの専攻、将来のキャリアに関連した就業体験を行う制度

知的な好奇心が 人間力を高める

安藤 兵庫県が10年前から、中学2年生に1週間の社会体験をさせています。パン屋さんや、工場、農家などに行って、自分が生きていることをしっかり学ばせようということですが、中学2年生の感受性の強い時期にはじめるということはとてもいいことだと思いますね。だんだんと全国の中学校に広がっています。

いまの学生たちは、知識の吸収には全力投球ですが、知的な好奇心は薄いと思うんです。知識と好奇心は別です。好奇

心はいわゆる知識の詰め込みだけではなくかかなくてこないものですし、好奇心がないと次の世界を切り拓いてくれるような子どもたちが育ってこない。

小宮山 私もほんとうにそう思っています。サイエンスも、もともと自然に対する好奇心から生まれたものですね。私は大学で若い人たちと30年余つきあってきましたが、実験をやっている、「おもしろい」とほんとうに思った学生は目の光が変わってきます。いままで、チワワみたいな目をしてきた青年が、それこそオオカミの目になるわけですね。あの経験をどこかで積まないと、社会に対する志だとか、他者を強く意識するとか、そういう“人間力”みたいなものはなかなかでてこない。

安藤 それと、一言でいうと「礼儀」がない。自然に対する礼儀、人間同士の礼儀、生き物に対する愛情や礼儀もありますが、社会自身が礼儀をどんどん切り捨ててきている。先日、地方都市で美しい棚田を目にしました。そのふもとに、突然、コンクリートの護岸があらわれて、美しい棚田をこわしている。自然に対する礼儀は一体どうなっているのかと思いますね。

小宮山 教育論では、すぐ「最近の若い人は…」という。しかし、大人がちゃんとしていれば子どもは育つ。いまの学生に対する分析はもちろん必要だけれども、彼

らにどういう機会をわれわれは与えることができるのか、それを考える必要があります。

私は、まず大学のなかでできることをはじめつつ、社会にも協力を求めたいと思っています。工学部では、修士の1年生をインターンシップに2ヶ月だしていますが、企業には「働いている大人の姿に触れさせてほしい」ということでお願いしています。

安藤 2ヶ月だったら変わりますね。私の事務所にも建築学科の学生に、5人くらいですが、春と夏、大阪に1ヶ月ほど来てもらい、月～金は模型づくりなどのアルバイトをもらって、土日は、京都や奈良の日本の伝統的な建築を研究する。例えば、大徳寺を自分で選んだら、大徳寺に一日中座って考えたり、スケッチをしたり、図面を描いたりします。何回も行くので顔見知りになったお坊さんから「何しに来ているの?」と聞かれて、対話がはじまることもある。終わったあとに、レポートを書いているんですが、「自分を見つけ出すことができた」という人がときどきいるんです。4年ほど続けていますが、ずっとやっていこうと思っています。2ヶ月もやって学校に帰ると、大学の先生から「安藤さん、礼儀正しくなった。目の色も変わってきて、あのままいくと、ひょっとしたらおもしろいことになるかもしれん」といわれます。

若い人たちはやり方さえある程度うまくいけば、すぐ前に行くんですね。



基礎と先端を結ぶ 学術俯瞰講義

小宮山 若い人は変わります。だからこそ、大学というのは大事だと思うわけです。

これは大学における学術の陽と陰といえるかもしれないけれども… 陽は、すばらしい先生方がおられていろいろな体験ができるということ。陰は、私は自分の学生時代にも感じたんだけど、大学の先生が授業で教えてくれることと新聞などでみる先端的な研究や技術との距離、自分の将来を考えたときの大学と社会とのギャップですね。そのギャップは私たちの時代よりいまはもっと大きい。大学生になってはじめて聞く講義は、昔とそれほど変わらない、いわゆる基礎ですね。基礎はもちろん重要だけれども、いま教えられている基礎と、先端との距離がものすごく広がっていると思うんです。

駒場で、ずっと前から同じ数学の試験を学生たちに受けさせて統計をとっていますが、得点はどんどん下がっています。だけれども、私はある程度当然だろうと思っているんです。われわれのころにはなかったゲノムや、情報科学など、別の基礎がたくさんできてきているんですから。私たちがやるべきことは、この距離を何とかして縮めることです。そのために、教養の再編成にも勇気をもって取り組む必要もあるでしょう。

先端により近い駒場の教育、このために安藤先生のお力をお借りしたいと思っています。例えば、小柴先生が「いま、物理というのは何を目標しているのか」「これからの物理はどうなるのか」ということを物理学について話すわけ。それで、安藤先生が建築学についてやるわけですよ。

安藤 1回ぐらいで？

小宮山 いやいや、1回だと講演になっちゃうから、4回。それで、藤嶋東京大学特別栄誉教授が無機化学について、無機化

学はここがポイントだと思っているというのを4回。そうすると12回でしょう。それが“教養”ではないかと思いますが。

私は「学術俯瞰講義」という名前にしようかと思っていますが、冬学期からはじめたいと思って教育担当の古田元夫先生と相談しているんです。

コンピュータはレベルアップしている、人間はレベルダウンしている？

安藤 この10年のコンピュータの進歩、まあ、進歩とっていいと思いますが、それが、人間の片方で好奇心を広げ、片方で狭める、両方の作用をしていると思うんです。いまのところ、広がるより、狭まっているのではないかな。われわれの建築の世界でも、図面から何から何までコンピュータです。コンピュータはあらゆる研究のもとに総合力でレベルアップしているけど、人間はそれについていけなくて、自分がどの場で頑張れるのか、ということがなかなか理解できないままに時間がたっている。全体像がみえていなくて、混乱している状態ですね。

小宮山 半導体の分野でもまさにそれができています。20年くらい前までは、全体をみることができた人はいましたが、それはショックレー(米国の物理学者。「トランジスタの父」と呼ばれる)が足の3本立ったトランジスタをつくったところからやっていた人です。あそこからやっていた人は、どんな複雑にみえても、全体からいまやっていることが構造的にみえたんです。だけれども、いまはもう全体をみることができない人はいません。特に、若い人は、途中から入ってきて、深さ1ミクロンの孔をほれなんていわれても、なんのためにほる

のかかわらないわけです。

3足のトランジスタに戻ることはできませんから、全体像と細部をどうやって二つながらみえるようにするか。ここが大学に問われている本質ではないかと思っています。

安藤 そうですね。それには小宮山先生のいわれたように、自律分散型をもうちょっと協調型にしないとイケないと思うんですが、それは大学の一つの役割ですね。

もう一つ、地球はいのちがあるものです。いのちがある世界と、自然に少し無関心な人たちが仕事をしている人工的な世界、この2つの世界がどんどん離れてきています。

自律分散協調系の 実践例としての 瀬戸内オリーブ基金

小宮山 自律分散協調系というと、私にとっては瀬戸内オリーブ基金*が非常に具体的なイメージなんです。豊島、直島をはじめ、緑の再生を目指していますね。価値があると思う目標があるから、みんなと一緒におもしろがってやれるんですね。

*瀬戸内海の島々や沿岸にオリーブをはじめとする樹木を植え続けることで、産業廃棄物の完全撤去を待つ豊島の人々が夢見たかつての緑あふれる瀬戸内海の風景を取り戻し、本当の意味で豊かな暮らしのできる場となることを目指し設立された基金。

安藤 ええ、もう瀬戸内海の島々や沿岸部全域に活動が広がっています。

小宮山 大学の先生は自律分散に決まっているんです。協調の仕掛けをつくるためには、具体的に燃えられる目的が必要だと思っています。

私が、いま考えているのは、知の全体像をもう一度持ちたいということです。具体的な目的、おもしろがるものをつくりたい。

「学生時代に、後で「しまった！」と思わないくらいに、もっと死に物狂いでやらなければいけないことはいっぱいあるだろうと思うんですが、」 — 安藤 —

その手始めに、物理化学的な“ヒト”に向けて、ゲノムなどのいろいろな最先端の知を統合しようと思っています。

安藤 大事なことは人々が「いのちある地球」を体感することです。日本は、急成長した1960年代から、国土を随分破壊してきました。「人間がともに生きてきた美しい自然をもう一回見直さないかん」という思いから、瀬戸内海にオリーブ基金をはじめたんです。これはオリーブという名前ですが、その場所の植生に合った木という意味です。1000円の募金で100万人集めようという運動をしながら、片方では産業廃棄物やゴミなどの問題をずっとみながら建物をつくっています。

瀬戸内オリーブ基金の一環で「ドングリ大作戦」という、ドングリを種から育てていく活動をしているのですが、あちこちの小学校で、われわれの運動に賛同してくれました。一校でドングリを3万個拾って、これはだめだというやつを選別して取り除いて、残りを土の中に入れますと8割発芽するんですね。それを子どもたちが2年くらい育てて、はげ山に戻していますが、そのことを通して、いのちのあるものには育つものと育たないものがあるということを感じます。成績のいいやつもいるけれども、野球の上手なやつもいる、魚を獲るのがうまいやつもいるし、魚を育てるのが得意なやつもいる。いろいろな人間がいるように、植物にもいろいろあるんだということを子どもの時代に体で感じたほうがいい。そして、土の中でしっかりと育ててきたものを山へ戻すことによって、社会

や家族に対する愛情を育み、そして自分たちの生きる大きな力になると思っています。るんです。

では、「生きるエネルギー」がどこからくるのか。親が子どもを育てるときに、「この子のためならば、すべて投げうってもいい」という、いのちの関係というがありますね。そのいのちの関係が非常に薄くなっているのではないかと。子どもたちにいのちの関係を体で感じてほしい。子どもたちは、土の中にドングリを入れて、育てのを楽しみにしています。育てきたらすごく感動するんですね。こういうことを子どもの時代に体験したなかから、先生がいわれている総合力のある子どもがでてくるのではないかと考えています。そういう子どもが10人に1人でもいいから、育ててほしい。



瀬戸内オリーブ基金「どんぐり大作戦」
子供たちと約3万個のどんぐりを拾った

小さいドングリの話から、今度は京都市議定書の話になりますと、われわれの事務所にいる卒業生は環境や周囲のことに無関心なんです。基本的に、自分の限られた興味の対象にしか目を向けない。そして、関心があったとしても立ち向かう勇

気がない。自分たちが地球温暖化を騒いでも何もできないのではないかと。いま、地球に60億人いる一人ひとりが考えたら、地球の温暖化に少しは役に立つというふうには思わないんですね。いまはセンター試験のような知識詰め込み教育が中心ですから、いのちや地球を体感することなどは切り捨てられてきているんですね。

大学と社会が 本気でぶつかる

小宮山 いまおっしゃった「小さいころ」からということと、もう一つは60億の中の一人がやっても、という無力感を克服していく、そこが成長の過程で重要だと思っているんです。いま「10人に1人でもいいれば」とおっしゃったでしょう。そういうふうになるには、子どもも大人も、相当の経験が必要なんじゃないでしょうか。

私は、変わると思います。それこそ30～40人の組織だったら、2人か3人、この組織を変えようと思う人がでてくると変わります。ある種の合理性を持って、熱があって、「生きる力」のある人たちがいれば。いままでもいい方向だったり、悪い方向だったりするけれども、それなりに変わってきている。無力感を救うというのは、やっぱり大人でしょうね。

安藤 無力感というか、実感がないとい



うことでしょね。もう一つは、社会と距離を持って冷静ですね。「そんなことをやっても、何も変わらない」といってしまう。「もう一つ踏み込め」と。責任ある個人の集団がぶつかりあって、はじき飛ばされたり、またひつついたりしながら大きな力になっていく。大学は象牙の塔で、社会とは遠い世界にみえますね。責任ある学校と責任ある社会というものが本気でぶつかっていないと思うんです。

小宮山 私は工学部のときに、大学が大学である理由はなんだろうかと一所懸命考えたんです。確かに象牙の塔だといって批判されている面はあります。しかし、象牙の塔的なものがなくなったらいいのかというと、そうではないと思うんです。

私はパイロット部局とっていたんだけど、例えば武田先端知ビルが特区みたいな形で、産業界の人も、NPOの人も、大学の人も一緒になって、社会と本気で向き合うみたいなどころと、象牙の塔的な大学の伝統を守りつつ、必死で学術をやるみたいなどころと、それからその中間と、大学全体として三層構造をつくっていくことが必要だと思っています。

学生たちよ、 自分の先にある 世界を見よ

安藤 私は仕事をしていて、「もうちょっと

勉強しておいたほうが良かった」と思うことが多くあります。西田幾多郎先生と和辻哲郎先生の記念館を設計依頼されてつくりましたが、和辻先生の本は多少読んでいたんですが、西田先生の『善の研究』を読んだことがない。早速、西田幾多郎を読むわけですけれども、もちろんなかなかついてはいけません。

学生時代に、後で「しまった!」と思わないくらいに、もっと死に物狂いでやらなければいけないことはいっぱいあるだろうと思うんですが、このことをいっても、学生たちはさめているんですね。センター試験に通って、東京大学に入って、気持ち安定している。だけれども、学問に安定はないわけでしょう。いまの学生たちは、自分が追求していく学問の先に、世界中の知性がぶつかり合っている世界が上にあるんだという認識があるのか、自分の先にある世界をみて、不安いっぱい頑張っているかということ、意外と不安じゃないんです。賢いから、自信があるのかもしれない。

小宮山 それこそ、学術俯瞰講義が必要なんです。

若い人の自信って、自分の経験でそう思うんですが、非常にあやふやな、あるときは何でもできるように思っても、あっという間に崩れる。

安藤 自信が崩れたとき、もう一步、二歩、前に踏み込んでいく勇気があるのか。勇気を持つためには、エネルギーがいる。そのエネルギーは、自分の家族とか、い

のちあるものに対する愛情だと思うんですが、そのエネルギーの部分、「どうしても、このために頑張るぞ」という思いが欠落している。片や、今の学生たちは自信はあるけれども、不安がないから緊張感もない。

小宮山 これは永久のテーマです。『誰がために鐘は鳴る』の映画で、ロバートが怪我をして、マリアや仲間を逃がすために自分が残るんだけど、そのときに、「自由のために死ぬ。いや、死ねない。祖国のために死ぬ。いや、死ねない。マリアのために死ぬ。これなら死ぬ」というラストシーンを覚えています。そういう話です、先生の話は。

大学は叡知の中心、 都市の中心

小宮山 先生は著書のなかで、「都市はいろいろな人がいて、その人たちが協調して成り立っていく。特に広場という空間が大事だ」ということをおっしゃっていますね。

安藤 基本的に広場というのは、人間の魂の交流の場所、いのちに対する愛情の交流の場所です。その広場の一つが大学になるでしょうか。叡知をみんなが愛情をもって作りあげていく、それを社会の人たちが察知して、お互いに対話しながら、

大学をつくりあげていくということですね。

小宮山 新しく町をつくる時、大学を中心にできた町は成功していますね。

安藤 ええ。ところが、この20年、大学を全部郊外にだしたんですね。大学を中心に、いわゆる知というものを中心に都市があるべきなのに、大学を外にだしてどうするのかと思いますね。そういうふうにしてきた都市が衰退していています。これはゆゆしき問題だと私は思います。

小宮山 いまのお話は都市のなかの大学ということでしたが、今度は大学を一つの都市に見立てたとき、そのなかでの広場になり得る空間ということでいえば、昔は山上会館がファカルティクラブだったんです。飯を一緒に食ったりして、そのときに分野の違う先生たちが交流して、新しいものが生まれた。だけど、それは教員が100人くらいのときの話ですから、私たちは4000人という前提でつくる必要があるんですね。

安藤 ハーバードやエールに半期ずつ行っていたんですが、ファカルティクラブで他分野の人たちや外国の人たちとも交流しています。いわゆる広場になるところが必要ですね。

小宮山 駒場に非常にいいファカルティクラブが今度できました。4000人だから、いろいろな形でやる必要があるんでしょうね。

安藤 外国の先生たちとも自由に交流できないといけないですね。外国の人たちにとっては、国立大学は大学の先生方が思われている以上に敷居が高いです。特に、日本はアジアの一員ですから、アジアの人たちにとって敷居が高くては、次の一歩が前にでないですね。

小宮山 近代の日本の大学は外国の学術を輸入してつくりましたが、自分たちで育てるというのが今なんだと思うんです。必要な知を大学で新しくつくっていく、これが根づきだすと、学術がもっと身近なものになると思うんです。

新総長に望むこと

安藤 20世紀は片方で戦争の世紀、片方でグローバルといいながら、商業主義的の世紀です。生活文化が中心の21世紀は、文化の中心の大学というものが果たす責任は大きいと同時に、先生方の責任は大きいと思うんです。小宮山先生が

いわれたように、分散型ではなしに、総合力で、どういうふうな社会に自分たちが発信していけるかということ、個人個人が考えなければいかんと思うんですが、まだ私がみる限りにおいては、先生方は自分の世界で頑張っておられる。小柴先生ぐらいになると分散型ではなく、協調型も兼ね備えていらっっしゃいますね。

小宮山 おっしゃるとおりだと思いますね。自律分散でこれだけいい人がいるところですから、広場を通じ、社会との間の広場もつくりながら、自律分散協調系の協調の仕掛けを総長としてつくっていきたいと思っていますので、ぜひご支援をお願いいたします。

(2005年2月25日 懐徳館にて)

安藤 忠雄 略歴

学 歴	独学で建築を学ぶ	
職 歴	昭和44年	安藤忠雄建築研究所設立
	平成9年11月	東京大学大学院工学系研究科教授
	平成15年3月	同職を退官、同年6月3日付け名誉教授
	平成17年1月	東京大学特別名誉教授
受 賞 歴	昭和54年	「住吉の長屋」(1976)で昭和54年度「日本建築学会賞」受賞
	昭和60年	フィンランド建築家協会より「アルヴァ・アアルト賞」受賞
	昭和63年	1989年度「フランス建築アカデミー大賞(ゴールドメダル)」受賞
	平成5年	「日本芸術院賞」受賞
	平成7年	「朝日賞」受賞
		1995年度「プリツカー賞」受賞
	平成8年	「高松宮殿下記念世界文化賞」受賞
	平成9年	イギリス王立英国建築家協会(RIBA)「ロイヤルゴールドメダル」受賞
	平成14年	「2002年度アメリカ建築家協会(A. I. A)ゴールドメダル」受賞
		ローマ大学名誉博士号
		第18回「京都賞」受賞
	平成15年	文化功労者
会 員	アメリカ建築家協会、英国王立建築家協会、フランス建築学会	
主な建築作品	昭和51年	大阪「住吉の長屋」
	昭和63年	大阪「光の教会」
	平成6年	大阪「大阪府立近つ飛鳥博物館」
	平成7年	パリ・フランス「瞑想の空間」UNESCO
	平成12年	淡路島「淡路夢舞台」(国際会議場、ホテル、温室、野外劇場、庭園)
	平成13年	セントルイス・アメリカ「ビューリッツァー美術館」
	平成14年	東京「国際子ども図書館」

他多数